終章

「日本らしさ」の現代的意味

最後に、これまでの考察をふまえて、産業社会の今後について若干の展望を試み、「日本らしさ」の現代的意味を考えてみたい。

まず、日本の文明化に関するこれまでに得られた洞察を利用し、それとのアナロジーを使って、産業化に関する見通しを明確化してみたい（なお、ここでいうアナロジーとは、異質なものの間に形式的な類似性を見出だすことであり、厳密な論証の対象となる命題の呈示ではなく、新しいものの見方の提起を目指すものである）。

日本の文明化は、大王たる雄略天皇の登場と共に始まったが、継体天皇擁立に至った王族の殺し合い、物部守屋・崇峻天皇殺害による推古朝改革政権の誕生、大化改新、壬申の乱と、大きな政策転換や政権交替はすべて武力闘争をともなってきた。しかし、天武・持統朝以後は、天皇位の直系継承の原則がしばらく保たれ、その間に、律令国家と仏教とによる本格的文明化が進展し、その結果、国家の文明化政策に対する地方の反発が生じ、それを包摂した安定的な体制が平安前期に形成され、現代に至るまで日本社会の基本的な枠組みとしてそれが保たれてきた。

産業化は、このような日本の文明化とかなりパラレルな過程をこれまでたどってきている。序章で述べたように、十九世紀半ばの科学革命が産業化の起点であり、十九世紀後半には、中国（清）が文明の最高峰たる中華帝国の誇りを捨てて西洋文明の本格的受容を試みはじめ、日本が開国し、西欧（および北米）と東アジアという、最高水準の物質文明を達成していた二つの地域が共に参加する世界システムが形成された。また、帝国主義と呼ばれる列強による世界分割が進み、今世紀前半には二つの世界大戦が生じている。このことからも、産業化は当初より、西欧と

東アジアを二つの中心とする地球規模の出来事であったことが分かる。

また、産業化の開始から第二次世界大戦終了までは、非常に不安定で武力行使が絶えない時期であり、壬申の乱までの日本文明化と類似している。この時期の不安定性の最大の原因は、西欧の国民国家システムの均衡を保つ要としての役割を担ってきたイギリスの世界経済における優越が、ドイツ、米国、日本などの追い上げによってゆらぎはじめ、いわゆる覇権国の交替が不可避となったことである。覇権を巡る争いが不安定性の直接の原因であることも、日本文明化と類似している。

産業化の第二期は、第二次世界大戦後であり、米ソという二大超大国を中心に国際秩序はかなり安定しており、先進国の高度成長にみられるように、産業化が本格的に進展した。これも、天武・持統朝以降の、かなり安定した政局のもとでの文明化の本格的展開と類似している。

産業化の第三期は、一九六〇年代末・七〇年代初からはじまった。米ソ二大超大国の地位がめだって低下しはじめ、ソ連は崩壊してしまった。そして、成長の限界・公害・環境問題を中心に、産業化に対する多様な反発が一斉に生じるようになってきている。これも、日本の文明化における八世紀後半から九世紀にかけての状況に類似している。

したがって、現代の産業社会は、日本文明化における平安前期の体制に相当するような、長期持続が可能な体制、産業化に対する多様な反発を包摂した安定的な世界体制をいかにして構築するか、という課題に直面していると考えることができよう。

このような歴史の見方は、西欧の歴史をモデルにして考えてきた従来の理論からは導き出され

なかったもののようである。西欧の源流となった二つの文明、イスラエル王国とギリシャ・ローマは、いずれも文明化の結果として安定的な体制を構築することなく滅び去っており、そのことにヘーゲルは西欧文明のダイナミズムを、シュペングラーは西欧の没落の可能性を読み取ってきた。いずれにせよ、メソポタミア、エジプト、インド、中国の文明は、アジア的停滞として西欧人から蔑まれ、シュペングラーやトインビーもそれらを正当に評価することはできなかった。したがってそれらをモデルとし、長期にわたって安定的に存続する体制を産業化の目標におくという発想は、過去を否定しつつ進歩を続けるという、産業化に関する従来の西欧的イメージとは相いいれないものであったのではなかろうか。

しかし、今日のわれわれは、安定的な体制を構築できるか、さもなければ地球人類全体が破局を迎えるかという、二者択一の状況に置かれているのであり、西欧的な産業化のイメージはそろそろ捨てられなければならないだろう。そして、あらゆる偏見を排して、長期間存続した諸文明の叡智から学ぶという謙虚さを持たなければならないはずである。日本は、平安前期からたかだか千年余りしか経過していないとはいえ、イギリスを除く欧米文明に比べれば圧倒的な安定性を実現してきたわけだから、日本の過去からも多くの示唆が得られるに違いない。

たとえば、ソ連崩壊後の世界秩序の正統性の中心は、唯一の超大国である米国ではなく、国連になりつつあり、世界各国の多様な利害のそれぞれが、国連という「錦の御旗」を求めるようになりつつある。これは、今後の世界秩序が、メソポタミアにおける聖都ニップールや日本における天皇のような存在として、国連を統合の中心としたものになるような力学が働き始めているこ

とを意味しており、メソポタミアにおける都市国家統合システムや日本の天皇制の経験は、今後の国連について考える上で多くの示唆を与えてくれるのではなかろうか。

このように、これまで西欧的価値観によって蔑まれてきたものにこそ、今後の世界を救い得るような叡智が秘められている可能性が高いのであるから、あらゆる偏見を排してそれらから謙虚に学ばなければならないのである。とりわけ、西欧起源の終末論的歴史観が抱いてきた、歴史がその実現を目指すような理念は、どのようなものであれ、今後は、その実現を歴史の最優先の目標として固執するべきではない。その理念がそれ自体としては、いかに立派な文句のつけにくいものであれ、それに固執すると、バランスを失って、人類を滅亡へと導く可能性が非常に高いからである。その意味で、あらゆる理念が説得力を失い、西欧的な意味で歴史が終焉したといわれるような状況が生まれてきたことは、特定の理念に固執して破滅への道を歩む可能性が減ったという意味で、望ましいことである。

終末論的なものに限らず、理念を追及するとき、人は、自分が善に向かいつつあると思い込んでしまいがちである。そして、悪を排除し、善を求めるという発想が生まれ、それが、結果的には最悪のものを生んでしまうことは、よくある。自力で善を求めず、自己の悪を見詰め、ただ善が訪れるのを待つべきだということは、宗教の最も深い叡智であり、社会の運営に関しても同様のことがいえるであろう(1)。

たとえばある宗教家は、自分に従う人達に対して、それぞれ悪魔が心の中に何匹残っていると指摘して、悪魔の数を減らすように指導しているそうだが、そのような発想法は根本的に誤って

いるのではなかろうか。私などは、少なくとも一〇八匹の悪魔（煩悩）が心の中に住んでいるけれども、それぞれいとおしいので、栄養を与えて生き延びるように配慮しているつもりである。悪魔は相互に仲が悪いので、数が多いほど、相互の争いも多くなり、全体としてある程度のバランスがとれ、極端に道を外すような行動を人間が実際にすることを防いでくれるのである。そして、おそらく、絶妙のバランスがとれるような原点が存在するのであり、それを見付けることが、煩悩を断たずに涅槃に入ると古来言われてきたことなのではないかと想像している。

しかし、悪魔の数を減らせば、バランスが崩れて、大きく道を外す可能性が高くなってゆく。そして、すべての悪魔をなくしたと思ったときに、最後に残った一匹の悪魔が、世界を創造したとされる唯一神に他ならないのである。バルトが批判したような、二元論的切断によって生まれた西方キリスト教の神とは、このような存在であろう。

今後登場し得るような終末論的理念として最も危険なのは、環境問題をめぐるものである。事実、かつて社会主義的理念にとりつかれていた人の多くが環境派に転向しており、そのような発想になじみやすい問題なのであろう。

ここでも、極端な理念への固執が破滅への道であることは明らかである。熱狂的な環境派の人は、生活を過去の理想的な状態に戻せば人間と自然との調和は取り戻せると単純に考え、江戸時代風の百姓暮らしや未開風の狩猟採集生活にあこがれて、それを実践し、それを絶対的正義とみなし、その観点から現代の物質文明を手厳しく批判する。しかし、考えてみれば、未開時代の生活様式はその当時の人口のもとで自然と調和しうるようなものだったわけであり、江戸時代につ

いても同様である。もし、現代の膨大な人口が全員当時の生活を実践すれば、たちまち森林資源などは枯渇し、当時の人口水準に戻るような人口調整は不可避になる。その過程で大多数の人は淘汰されなければならないので、誰が生き残るかを巡って大戦争が勃発しかねない。しかもその場合、核兵器などの究極兵器の使用を控える誘因は存在しないので、情け容赦ない大量殺戮が必然的に生じてしまうことになる。

このように、昔暮らしを理想としてみずから実践している人は、口ではそのような大量殺戮にも絶対反対と唱えるだろうし、物質文明の恩恵に浸っているわれわれからみると一見非常に高潔で立派な人たちに見えるものの、その内実は、人類を滅亡させようとする最大の悪魔の手先なのである。そのような人たちの精神が実は優れたものとは言いがたいことは、既に述べた。

産業化の原動力は、十九世紀半ばの科学革命以降の科学であり、今後の事態の推移を決定付けるのも、科学が今後、どのような方向に向かって変化（発展といってよいかどうか私にはわからないが）してゆくかであろう。

産業化が引き起こした社会の変化の根本に科学の問題が存在することを明白に見抜いたのは、大衆社会論と呼ばれるものの論者たちであろう。オルテガに代表される彼らは、西欧の伝統的な文明の理念に照らして、科学が包括的な世界観を捨てて専門化し、伝統的な文明に精通した教養人に代わって科学者が社会を指導するようになりつつあることに、西欧文明崩壊の危機感を抱いた。それに比べると、いわゆるマルクス主義は科学的社会主義を名乗ったように生まれたばかりの科学こそ社会変革の原動力であるとみなし、科学が生み出したピラミッド型大規模組織の合理

的運営方法（2）に従って、社会全体を計画経済的に運営し得ると判断し、市場経済から計画経済への移行をめざしたのである。したがって、それは科学の成果に対して楽観的な人々が共有する発想を最も極端に追及するものであり、一九七〇年代以降の、産業化に対する多様な反発・科学に対する反省の深まりとともに、その生命を終える運命にあったことは、やむをえない。

オルテガに代表される大衆社会論は、ある意味で、現代の産業化に対する懐疑を先取りしていたとも評価しうるものであり、一部の保守主義的論客によって再評価されるようになったのもうなずける。しかし、それは所詮、西欧文明の伝統的価値観を前提として、そこから、それを否定して生まれた科学を批判しているのだから、科学を生んだ啓蒙主義による西欧文明批判、とりわけ西方キリスト教批判に対する配慮を欠いているという点だけからでも、重大な欠陥を有していることが示唆されよう（3）。西欧文明を蝕んできた西方キリスト教の呪縛から西欧を解放するための、大きな一歩を踏み出したというだけでも、啓蒙主義の生み落とした科学は非常に重要な貢献をしたのであり、それを西方キリスト教の価値観から批判するというのは、不生産的な時代錯誤にすぎないのである。

したがって、われわれは、大衆社会論的な科学批判を受け入れるべきではない。科学によって大衆社会論の価値前提は既に否定されたのであり、そのことをふまえたうえで、今後の科学がどの様な方向に進むべきかを考えるべきであろう。

その際に、現代の科学は、西方キリスト教を批判・否定したとはいえいまだにその伝統的な発想法から完全に自由ではなく、とりわけ二元論的切断の論理にとらわれており、現代科学の生み

出すさまざまな弊害の大きな源の一つはこの点にあるということに着目すべきであろう（4）。したがって、本書で試みてきたような、西欧起源の二元論的切断に対する批判の作業が、科学の今後を考える上でも非常に重要な論点となるであろうことが予想されるのである。そのような作業のための準備の役割を、本書がいささかなりとも果たすことができれば、著者として望外の幸せである。

注

1　このことは、たとえば、ハイエクによる科学主義批判とバルトの革命的巨人主義批判との類似に、見ることができる（ハイエク・F・A、佐藤訳『科学による反革命――理性の濫用』、木鐸社、一九七九年、バルト『ローマ書講解』、四五〇頁以下、平山「比較経済思想序説」、二　限定合理性・言語ゲームと普遍的価値、参照）。

2　ボールディング『組織革命』、参照。

3　オルテガに対する私の批判は、平山「価値と自由」、第一回、三七二頁以下、参照。

4　医学を例にこのことを論じたものとして、平山朝治「脳死・臓器移植と死生観」、『情況』、一九九三年四月号、平山『比較経済思想』、所収、参照。